

青海チベット族の宗教と寺院組織の運営ー中国青海省貴徳県S村の寺院を中心にー

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Qinghai Tibet, Temples Society, Organizational management 作成者: ☒藏, Gazang メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00049496

青海チベット族の宗教と寺院組織の運営 －中国青海省貴徳県S村の寺院を中心に－

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
ガザン (尢藏)

要旨

チベット地域の寺院には、土着宗教と呼ばれるボン教の寺院とチベット仏教の各宗派の寺院、あるいは地域レベルの巨大な寺院や地方村レベルの寺院などが存在しており、それぞれの寺院組織、教育状況、寺院経済なども違いがある。調査対象である青海チベット族の地域にとって、主流となっている宗教はボン教、チベット仏教のニンマ派とゲルク派であるため、本稿では、1980年代に実施された宗教回復運動以後の、青海チベット族の宗教と寺院組織の運営について記述する。とりわけ青海チベット族の地方村レベルにおける寺院であるS村のボン教寺院、ニンマ派のンガォカン（集会堂）、ゲルク派の寺院と三つの寺院組織の運営について記述する。

キーワード

青海チベット族、寺院社会、組織運営

Religion and temple management in Qinghai Tibet Society － Case studies from S village in Guide county, Qinghai province, China －

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

Gazang

Abstract

Tibetan society has both temples of indigenous Bon religion and ones of different sects of Tibetan Buddhism. They are different in size; some are county temples others are village temples. They are also different in their organization, education, and economy. This paper focuses on Qinghai Tibet area and describes the temples of the study village. Based on my fieldwork in the study village, which has temples of Bon religion as well as ones of the Rnying Ma and Gelug schools of Tibetan Buddhism, this paper describes religion and temple managements in a Qinghai Tibetan village after the religious restoration movement in 1980s.

Keyword

Qinghai Tibet, Temples Society, Organizational management

一. はじめに

チベットでは、原始宗教或いは土着宗教と呼ばれるボン教と北インドより伝来したチベット仏教の二つの宗教が共存している。現存の史料を見ると、「7世紀頃まで、チベットに土着宗教のボン教が普及し、ニャティ・ツェンポ (gnya' khri btsan po: 伝説上の初代ツェンポ) から26代にわたり、歴代ツェンポはボン教にもとづき国を治めた」(王森2016: 1)。あるチベット僧が残した記録によれば、仏教はソンツェンガムポの祖先ラ・トトリニェンツェン (lha tho tho ri gnyan btsan) の時代に伝来したと言われる。伝説によると、ある日天上から宝箱が落ちてきた。中には金の塔や経典、まじない文などが入っていたらしく、それ以降に、仏教がチベットに伝来したという説もあるのに対し、王森 (2016: 3) 氏によると、ラ・トトリニェンツェンの時代に仏教が伝来したというのはあくまで伝説にすぎないようである。チベット初の統一王国(吐蕃)を樹立するソンツェン・ガンポ王 (srong btsan sgam po: 617~650, 32代目の王朝) は、吐蕃内部の統治体制の確立と周辺国との関係に注意を払ったため、北インドと中国の二方からチベットへ仏教が本格的に伝来した。それ以降、8世紀頃までボン教と仏教の間に様々な矛盾・激烈な葛藤の問題が生じた(王輔仁2004: 19~23)。外来仏教文化(インド仏教と中国仏教)がチベットに入ってからチベット本土宗教-ボン教と衝突し、多くの闘争と融合を経て、最終的にチベット社会に適合し、チベット民族に普遍的に受け入れられるチベット仏教文化が形成されたのである(牛黎涛2014: 207)。それらの混乱が起きたことが原因で、チベット王ティソン・デツェン (khri srong lde btsanチベットの37代国王) が仏教を国教と定め、チベットに受け入れ広げられた。その一方、土着宗教のボン教は抑圧を受け、一旦衰退した。

チベット仏教文化が時代の進歩とともに発展し、宗派も四大宗派 (thu' u bkaun blo bzang chos kyi nyi ma 2005: 細かく分けると七大宗派があ

る) となった。それらの宗派は、ニンマ派、カギャ派、サキャ派、ゲルク派である。

上述のチベット土着宗教-ボン教とチベット仏教に対して、図像学と宗教学的の研究は比較的蓄積がある。未解明な部分の多いボン教研究の中でも、青海省において有名なボン教寺院であるボンギャ寺に赴いて短期的現地調査を行い、ボン教の神々の体系に関する研究成果(森 1999) が出現している。ネパールにおけるチベットボン教寺院、チベット族自治区、青海省と甘肅省、四川省におけるチベットのボン教寺院の現状に関する記述的研究 (Tsering Thar 2003) もあったが、調査現地へ赴いて長期フィールドワークを行うことが困難であるため、民族誌的な先行研究が少ない。中でも、現在、外国人はチベットの寺院社会で現地調査を行うことが不可能である。

李安宅氏と夫人于式玉氏 2人が1938年より3年間にわたって、チベットの六大寺院が包括する甘肅省甘南チベット族地区のラプラン寺での人類学的調査により、チベットの宗教史を描きだした(『藏族宗教史之实地研究』1988)。近代化の進むチベット社会において、チベット仏教の長期にわたる歴史変遷を通じて、チベット民族の独特な考え方が継承され、チベット民族の知恵と徳行が積み重ねられて、チベット社会の発展と民衆生活の向上がはかられ、チベット民族の特色ある仏教文化体系を維持していくことにつながることにに関する研究がある(牛黎涛 2014)。また、チベットの伝統的教育及び寺院教育に関する研究が多く、寺院教育の形成、諸宗派の寺院教育の発展、ゲルク派の寺院組織構成、寺院教育の制度、寺院教育の特徴などに関しては(周潤年1998)すでに研究があり、チベット社会における寺院経済の発生・継承・発展する内在的要因に関する論述(絨巴 1993: 34~40)、チベットの道徳観と寺院経済の発展と展開、近代の寺院教育などに関する研究が既存する(牛黎涛 2005, 2008, 2009, 图齐 2005)が、先行研究の中で地方村レベルの寺院社会は具体例として記述・論述の研究は少ない。

本稿では、青海チベット族の宗教と寺院組織の

運営について記述し、中でも現代の青海チベット族の地方村レベルにおける寺院であるS村のボン教寺院、ニンマ派のンガォカン（集会堂）、ゲルク派の寺院と三つの寺院組織の運営を記述するものである。しかし、1950年代以降より、三つの寺院組織は中央政府の宗教政策の下で運営したため、ほとんど違いが無いが、各宗派の寺院組織の現状として記述する。

二. フィールドの概要

2.1 調査地の概要

2.1.1 地理環境

調査地の貴徳県は青海省の省都である西寧市から114Km離れた東北地に、海南チベット自治州政府所在地から154Km離れた西方に位置する。貴徳県の南北の長さは90.6Kmであり、東西の幅は60.4Kmである。『貴徳風情』の記載によると、総面積は3,700平方Kmであり、2007年に、全県が管轄する行政区画は4鎮と3郷となる。全県に農牧民委員会が119あり（その中で牧民委員会は6）、生産合社が446あり（その中で牧業合作社33）、居民委員会が4ある。地理的位置は東経100°58'8"～101°47'50"、北緯35°29'45"～36°23'35"までである。この地域の生業としては、農業、牧畜業、商業、出稼ぎなどであり、農業については、地勢によって異なるが、一般には1月から4月（旧暦）の間に田畑を作り、6月から8月（旧暦）までの間に収穫する。

調査対象のS村落は、常牧鎮政府所在地から東北約7Kmに位置し、三つの自然村を管轄している。『貴徳県誌』（1995：65）によると、1985年100戸があり、人口は520人がいた。耕地は2,571畝、水田面積は600畝である。地理的には、北緯35°57'01"、東経101°31'06"である。

2.1.2 自然環境

貴徳県の気候は高原大陸性気候である。北部は温涼半干旱気候であり、南部は温冷半干旱気候である。春は干旱風が強く、夏は涼しい、秋は雨が

多く、冬は寒冷であり、全県大部分地区の年平均気温は2.2～7.2℃である。一番暑い季節は7月であり、平均気温は6.8～18.3℃である。一番寒い時期は1月であり、平均気温は-6.6～15.7℃である。昼夜の気温差は大きい（李2010：2）。

県内の年平均降水量は250mmであり、高地では、300～400mmである。月ごとの降水量の差は大きく、主に6月から9月に集中している。

貴徳県の地勢は南北が高く、中央部が低い。全体の地形は、山地、高原平地、河谷盆地で構成されている。

2.1.3 宗教

貴徳県の宗教は、仏教、ボン教、シャーマニズム、道教、イスラム教、キリスト教などがあり、仏教とボン教の信仰者は主にチベット族である。『貴徳蔵族簡史』（2012：203）によると、1950年に貴徳県でチベット仏教寺院（ボン教寺院も含めて）は90あり、1958年に貴徳県でチベット仏教寺院（ボン教寺院も含めて）は57あった。

現在は、貴徳県に仏教・ゲルク派の寺院は34、ニンマ派の寺院は20、ボン教は3である。主な廟は9である。

2.2 調査対象

本稿の調査対象は青海チベット族の宗教と寺院社会の組織運営に関するものであり、具体的な例としては、S村落に共存する三つの宗派の寺院社会であり、それらの宗派を村人は、「空に三種の日月星、地に三種のワンボンガォ」（gnam nanyi zla skar gsum//sa na ban bon sngags gsum）と日月星にたとえている。ワンは仏教（ゲルク派を指す）であり、ボンはボン教、ガォはガォバ或いは、ニンマ派（古宗派）である。三つの宗派がそれぞれ独自の寺院、経本を持っているため、以下で各宗派の寺院を具体例として取り上げながら、青海チベット族の宗教と寺院組織の運営について記述する。

三. 青海チベット族の宗教と寺院社会

青海省チベット族の地域において、チベットの土着宗教であるボン教 (bon chos) と、仏教 (sangs rgyas chos lugs) の各宗派、つまり、ニンマ派 (rnying ma ba 古宗派)、カギヤ派 (bka' brgyud pa)、サキヤ派 (sa skya pa)、ジョナン派 (jo nang pa) ゲルク派 (dge lugs pa) が分布している。1958年 (チベット解放以前) の青海省内部資料をもとに現地調査の研究成果とした青海省チベット仏教寺院の現状に関する研究 (則武 1993, 1995, 2005.) によると、西寧市・海東地区に1958年頃237ヶ寺があり、ニンマ派の寺院は少なく、多くの宗派はゲルク派である。しかし、海東地区に属する循化県の幾つかの寺院は、元来サキヤ派であったが、後に、ゲルク派に改宗した。中でも、青海省あるいは循化県の有名な寺院・ビンドウ寺 (文都寺) は1402年 (明建文四年) まではサキヤ派であったが、その後、ツォンカパの弟子によりゲルク派に改宗した。黄南チベット族自治州に1958年頃67ヶ寺があり、ニンマ派とゲルク派の寺院が多い。果洛チベット族自治州に1958年頃50ヶ寺があり、ニンマ派の寺院が多く、ニンマ派とゲルク派の混合寺院もわずかにある。河南モンゴル族自治州に1958年頃4ヶ寺があり、全部ゲルク派の寺院である。玉樹チベット族自治州に

1958年頃379ヶ寺があり、カギヤ派とサキヤ派の寺院も比較的多い。

1996年青海省宗教調査研究の統計によると、省全体ではチベット仏教寺院は655ヶ寺、ボン教寺院は11ヶ寺ある。「青海省委統戦部のある職員の紹介によると、2002年に再び全省宗教状況の研究調査を行ったが、具体的寺院の数と僧侶の人数はまだ未公開である。1996年の宗教状況と比べると、寺院と僧侶の数は約1%減少した」(曾传辉 2003)。

青海省におけるニンマ派の寺院は、主に黄南チベット族自治州、ゴロク (果洛) チベット族自治州、玉樹チベット族自治州の地区に分布しており、現在は170ヶ寺で僧侶は5,885人いる。一部のニンマ派の宗教者は在家の半僧半俗であり、集會堂を寺院と呼ばず、ンガォカン (sngags khang) と呼ぶ。主に黄南チベット族自治州同仁チベット族自治县、海東市の化隆回族自治县と循化サラ族自治县及び海南チベット自治州の貴徳県、共和県に分布している。現存するサキヤ派の寺院は28ヶ寺あり、僧侶は975人いる。寺院は玉樹チベット族自治州に分布している。カギヤ派の寺院は105ヶ寺あり、僧侶は3,647人いる。ジョナン派の寺院は9ヶ寺あり、僧侶は872人いる。ゴロク (果洛) チベット族自治州の甘徳県、久治県と班瑪県に分布している。現存するゲルク派の寺院

表1：1958年における青海チベット族の寺院数と宗派

地区	寺院の数	宗派
西寧市・海東地区	237	ゲルク派 (多数), ニンマ派 (少数)
黄南チベット族自治州	67	ゲルク派, ニンマ派
果洛チベット族自治州	50	ニンマ派 (多数) ニンマ派とゲルク派の混合寺院 (少数)
河南モンゴル族自治州	4	ゲルク派
玉樹チベット族自治州	379	カギヤ派とサキヤ派 (多数) ニンマ派とゲルク派 (少数)
海北チベット族自治州		不明
海西モンゴル族・チベット族自治州		不明
◆ 1958年に、海北チベット族自治州、海西モンゴル族・チベット族自治州の仏教寺院と青海省のボン教寺院を除く、合計737ヶ寺があった。		

(出所：則武 1993, 1995, 2005. により筆者作成)

表2：2002年の宗教調査報告における青海チベット族の宗教の現状

宗教	宗派	形態	分布地	寺院の数	僧侶の数(人)
チベット仏教	ニンマ派	出家	主に黄南チベット族自治州 ゴロクチベット族自治州 玉樹チベット族自治州	170	5,885
		半僧半俗	主に同仁チベット族自治州 化隆回族自治州 循化サラ族自治州 貴徳県, 共和県		
	サキャ派	出家	玉樹チベット族自治州	28	975
	カギャ派	出家	ゴロクチベット族自治州の甘徳県,	105	3,647
	ジョナン派	出家	久治県と班瑪県	9	872
	ゲルク派	出家	省全体の各地	343	12,800
				計 655	計 24,179
ボン教	無し	不明	不明	11	303

(出所：曾传輝 2003 により筆者作成)

は343ヶ寺あり、僧侶は12,800人いて、省全体の各地に分布している。土着宗教-ボン教の寺院は11ヶ寺であり、出家の僧侶は303人である(曾传輝2003)。

青海チベット族のゲルク派の寺院は、幾つの特徴を持っており、①僧院の規模については、中央チベットの大僧院に次ぐ大規模なものであり、②僧院の歴史についてはダライ・ラマ3世の青海布教を契機に建立された比較的新しいものである。③学問の伝統, 人的資源は、デブン大僧院(チベット自治区に位置し、チベット最大の宗派であるゲルク派の三大僧院：セラ、デブン、ガンデンとのデブンである)のゴマン(sgo mang) 学堂を本山と仰ぐといった3つの特性を持つ(石濱2011: 115)。

青海チベット族のボン教, 仏教の寺院でも、当然定期的に宗教活動を頻繁に行っており、その宗教活動の運営を経済的に維持する側は、主に寺院が属する村落と地域の信仰者たちである。地域の信仰者はあらゆる不幸が追い払われ、あらゆる幸せが得られる為、寺院に布施する。その布施された財産は寺院の財産となり、主に殿堂・仏塔の修築、宗教活動に使用するが、多くの大僧院では、僧侶の日常生活を扶助する場合もある。地方の多

くの寺院は、布施された財産は地域の農牧業や商売している人たちに利子をつけて貸している。その利子は寺院の財産となり、宗教活動に使用するが、村落の貧困の家に対して扶助する寺院もある。しかし、近代では、政府からも寺院に扶助しており、「2012年に青海省政府は、寺院社会管理工作の為、34,706万円の扶助をし、チベット仏教寺院の水道、電力、道路、通信などのインフラストラクチャーを行い、僧侶の部屋と集会堂も補修した。同時に僧侶たちに対して、養老や医療などの社会保険に関する惠民政策を実施し、僧侶の貧困を解決した」(丁莉霞2014)。以下にチベットの寺院の経済モデルを図1で示す。

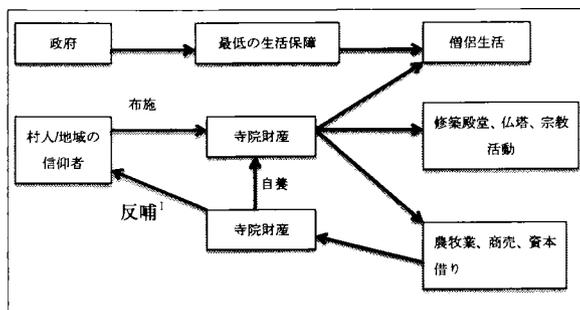


図1：近代チベット寺院の経済モデル

(出所：丁莉霞 2014: 73 により筆者作成)

現代チベット族の社会は、1950～1980年代までの集団所有財産の制度、1980～2000年代までの改革開放、宗教回復運動の実施、2000年代より今日までの西部大開発のなど一連の政策の影響により激しく変化した。それに伴って、寺院社会の管理あるいは寺院社会の組織運営も以前の伝統的な組織のみで形成されたわけではなく、近代的あるいは政策的管理委員会も設置した。今日のチベット族の地方村における寺院社会の組織は伝統的組織よりも政策的管理委員会の影響力が強くなっている。以下では、青海チベット族の地域において主流となっているボン教、チベット仏教のニンマ派とゲルク派の寺院社会に関して記述し、更に地方村レベルの寺院社会を具体例として記述する。

3.1 調査村におけるボン教の寺院社会

ボン教の開祖は、シェンラブ・ミポであり、彼は仏教における釈迦牟尼と同等の地位を占める。「チベットには仏教が7世紀前半から本格的に導入されたと考えるが、それまでのチベットにはボン教の原初形態が存在したと推定される」（立川 2009：41）。ボン教は仏教と同じく、独自の経典をもつ。

「ボン（Bon）教はチベットに仏教が入る前から彼の地に広く行われていた宗教で、従来チベット在来の宗教と言われてきたけれども、最近の敦煌文献研究の成果によれば、これもシャンシュン国以西から移入されたものらしいことがわかってきた。ボン教徒の東遷は吐蕃王朝成立以前に起きたが、ヤルルンを中心とする吐蕃王家の国家統一の原理として仏教が移入されるにつれ、ボン教は漸次さらに東に移り、現在の分布は、アムド南部（青海省）、カム西北部（四川省）、ネパール北部に限られる」（長野1987：712）。

以下に調査対象地であるS村のボン教寺院の概要と組織、宗教儀礼について述べる。

3.1.1 S村のボン教寺院の概要

S村のボン教寺院は、貴徳県政府所在地から約

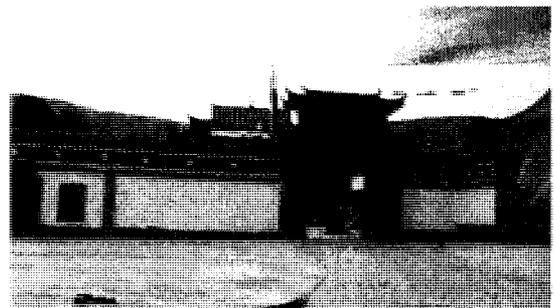
13.6Kmの南東地区に、常牧鎮政府所在地から約7Kmの北東地区に位置し、S村の中心地に位置しており、北緯35°57'01"と東経101°31'06"に位置する（写真1）。

貴徳県には、ボン教寺院が三つしかなく、Sボン教寺院はその一つである。その三つのボン教寺院の中で、一つの寺院の宗教者は、見た目は仏教・ゲルク派の僧侶の姿で、単にそれぞれに持つ独自の経典と信仰対象が異なることだけで、僧衣などは全く同じであり、結婚も禁止である。もう二つの寺院の宗教者は、在家する半僧半俗の宗教者であり（写真2）、Sボン教寺院の宗教者は、半僧半俗の在家宗教者に属する。

『貴徳県志』によると、1981年に、Sボン教寺院を開放し、59間の集会堂と、20間の供養堂、ほかに12間の部屋があった。宗教者は100人を越していた。

1980年代、文化大革命時代に破壊されたSボン

写真1 S村のボン教寺院



（出所：2014年8月 筆者撮影）

写真2 ボン教の半僧半俗の宗教者



（出所：2014年9月 筆者撮影）

教寺院を再建するときの主任（1940年代生まれ）の話によると、「このボン教寺院は、1972年に中央政府によって破壊され、1979年に中央政府から再建する許可を得た。しかし、そのときは、経済状況が悪く、直ちに再建できなかった。1981年に、再建が始まった。経済状況の良い家が寺院へ自発的に可能な限りの支援を行った。ボン教寺院の主任と長老たちの相談により、自発的に行った支援は、一番は1,000元、二番は500元、三番は250元と分級し、経済状況がよくない家には提供できる分の支援をさせた。しかし、寺院の再建へ全く支援してくれなかった家は無い。わずかな財産だけでも支援すれば、自分たちに良い仏の御加護があると村人は考えていた。村長や村の長老たちは各家から樹木を2本、5Kg程の小麦粉を寺院再建の負担分と決め、集めた」。

以上の話により、1980年代に再建した青海チベット族地方村レベルの寺院、あるいはS村のボン教寺院の状況を窺うことができる。2000年代までS村落には、ボン教の家でも、一軒の家に2人の男子が生まれた場合に、1人の男子はゲルク派の僧侶になり、もう1人の男子は半僧半俗のボン教徒として、家の生計を継承することになった。その頃、青海チベット地域においては、ゲルク派が強く、ボン教徒の力が弱かった。しかし、2000年代から、地域住民たちの生活も豊かになり、経済発展とともに、S村落のボン教の家は、男子が2人生まれても、仏教・ゲルク派の僧侶にさせず、僧侶になりたい子が少ないが、僧侶になりたい場合は、県外のボン教寺院の僧侶にさせるようになった。一方、S村の70%の家はボン教徒の家であるため、S村のゲルク派寺院の僧侶が少なくなり、宗教間の関係も緩やかになった。

2014年10月18日に、S村のボン教寺院は県級文物保護単位と認められた（写真3）。

3.1.2 S村のボン教寺院の組織運営

S村のボン教寺院にも以下に述べる仏教・ゲルク派とニンマ派の寺院組織とほとんど同じく、伝統的寺院社会の組織と政策による管理強化的組

写真3 県級文物保護単位



（出所：2015年2月 筆者撮影）

織との二重側面が見られる。「1994年の第三回チベット工作会議以降の僧院への管理強化や僧侶への愛国教育といった積極的な介入が示す通り」（大川 2013：251）、1980年代からチベット寺院社会には、伝統的寺院社会の組織と政策による管理の組織との二重側面が見られる傾向となった。伝統的寺院社会の組織には、ラマ²が1人、副ラマが1人、ゲルケ³(dge bskos) が2人、カンドンパ⁴(bskang 'don pa読経者) が1人で15日ごとに交代する。ウンゼ⁵(dbu mdzad) が1人、ジンチョバ⁶(rgyun mchod pa日常・祭) が8人いる。寺院管理委員会には、主任が1人、出納係が1人、財産保管員が1人いる。

以下に地方村レベルのボン教寺院組織を表示するため、S村のボン教寺院組織を図2で示す。

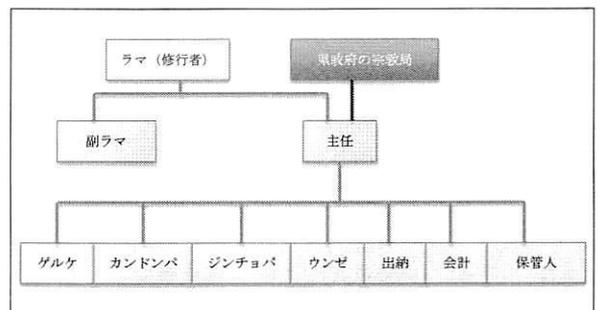


図2：S村のボン教寺院の組織

（出所：2015/4 現地調査により筆者作成）

（※図2のラマは性的生活ができない修行者或いは出家者であり、県政府の宗教局は政府の役人である。それ以外の役人は在家する半僧半俗の宗教者である。）

S村のボン教寺院のラマは、ほかに県外の一つのボン教寺院も管掌しているため、S村のボン教寺院に通常居住していないが、半僧半俗宗教者たちの教育、経典学習の状況、宗教活動などの面倒を見守っており、出家の僧侶姿である。副ラマは、寺院の最年長の宗教者であり、数年ごとに交代する。護摩儀式を行う際に、主な役割を副ラマが果たしており、年中儀式を行う際に、集会堂内の上手、ラマ席の次に席がある。一般の宗教者より、上席である。

2000年代の西部大開発以降、寺院の水道、電力、道路、通信などのインフラストラクチャーを行うため、政府からの様々な経済的補助プロジェクト（補助金）が配分された。それらのプロジェクトを配分することと政府の工作人が寺院を訪ねてきたときに、政府人員を接待する役は主に主任が担っている。また、県の宗教局へ僧舎を新築することや、寺院を修復することなどの様々の経済的補助プロジェクトの申請も主任の役割である。寺院の管理のほか、県宗教局からの宗教政策的通知要件がある場合は主任に電話連絡が入り、主任は政府から月給も貰っている。

ゲルケは大ゲルケと小ゲルケと2人おり、大ゲルケの主な仕事は、戒律や僧院での作法を管理することである。年中儀式を行う際に、礼拝者や施主たちが寺院に捧げた現金、物品などは、大ゲルケが記録し、宗教者たちの前で報告し、それらの礼拝者や施主たちなどのために祈願尊を唱え、お祈りをする。小ゲルケの主な役割はその記録した証明書を保管することである。

集会堂で毎日1時間程かけて読経する習慣が今日まで維持されており、その読経の役割はカンドンバが果たしている。数年前まで、1ヶ月ごとに宗教者内で皆が読経（カンドンバ）の担当を交替で担ったが、2000年代の西部大開発以降に、若者宗教者が村落から離れて、出稼ぎに行ってしまうと、集会堂で毎日1時間程かけて読経する習慣が継承できなくなってしまう。そのため、40歳以上の宗教者たちが半月ごとに交代して読経する義務を果たしていた。

ジンチョパの仕事は、主にボン教寺院の収入に関心を持つことであり、年中宗教儀礼を行う際に、必要な食物を購入したり、寺院の現金を村民や他人に貸借する役割を果たしている。現金を貸借する際に、知り合いの保証人が必要であり、その保証人の身分証明書と借用書が必要である。借用書に保証人の羊や牛など家畜数を抵当に入れると書く。両方が決めた期間内に返却しないと、5日間伸ばすことができ、その期間を過ぎると、利息が高くなる。そのように寺院の年中宗教儀礼を運営すると、利息のみで、寺院の年中儀礼が十分にできると70歳の宗教者（男性）が話してくれた。残った現金は寺院の財産となり、新築や寺院を修復する際に使用する。

ウンゼは、集会堂内の太鼓を打ち、読誦を先導する役割を果たしている。ウンゼの席は、僧院長であるラマの側、つまり集会堂の真ん中にある。数年前まで数年ごとに交代したが、ウンゼの役は重く、宗教儀礼を行うときも、読経あるいは全体を把握し、儀礼を行う前に、練習する必要がある場合もある。地域の発展とともに、出稼ぎなどで半僧半俗の宗教者たちも忙しいため、現在は、年ごとに交代するようになった。

ボン教寺院においては、収入の現金を保管する役人を出納係と呼び、数年ごとに交代するようになった。

会計係の仕事は、主に旧暦の10月15日に、寺院の収入や、各役人が交替する際に、計算する役割を果たしており、保管人の仕事は、主に寺院の財産を保管することである。

しかし、上にも述べたが、1980年代より、青海チベット族の寺院社会には、伝統的寺院社会の組織と政策による管理組織との二重の側面があり、その政策による管理組織あるいは寺院管理委員会は、主任と、出納、会計、保管人から形成している。

3.1.3 S村のボン教寺院の年中儀礼

1996年におけるS村のボン教寺院への調査報告によると、「各月の19日に、ダチ(zla chos月・読経)」という宗教儀礼を行っており、読経する経典名は、

クンザン (kun bzang), ジェデエ (spyi 'dul), タアラ (stag la) である」(tsering thar 2003:327) と記録があったが、筆者は2014年に S 村を訪問した際、多くの若者宗教者が出稼ぎに行ってしまうと、ダチ (zla chos 月・経) という各月の読経儀式を継承することができなくなったとのことで、現在は行っていない。

ボン教も、以下に述べる仏教と同じく年中宗教儀礼を行う日はチトウ (chos thog 法会) と呼ばれ、チトウの日時が定められている (表 1)。行事の運営はジンチョバが統括し、チトウを行う当日、礼拝者や施主などから現金や、物品を寄付された場合に、大ゲルケが礼拝者の名前と金額などを記録して、集会堂の真ん中、つまり、僧侶たちの前で報告し、施主たちのために、祈願する。礼拝者や施主たちにもらった現金と物品は寺院の収入の一部となる。

行事を行う当日、チダ (chos brda 法・鈴「通知の意味」) をする役員はゲルケであり、ゲルケが集会堂の前で銅鑼を多数打つと、半僧半俗の宗教者たちが集まってくる。以下に S 村のボン教寺院の年中儀礼の日程は表 3 で示す。

表 3 : S 村のボン教寺院の年中儀礼の日程 (旧暦)

月	期間	宗教活動名
1 月	17 ~ 19 日	村の年経
3 月	25 ~ 29 日	守護神の経
4 月	5 日	千祭 (stong mchod)
4 月	7 ~ 10 日	ニユン二修行
4 月	11 ~ 13 日	祭祀
4 月	21 ~ 23 日	(寂静憤怒)
9 月	25 ~ 29 日	守護神の経
10 月	9 ~ 14 日	憤怒の経, 14 日には、仮面舞踏を演じる
10 月	15 日	年末計算

(出所: 2015/4 現地調査により筆者作成)

3.2 調査村におけるニンマ派のンガォカン (集会堂)

チベット仏教はランダルマ王 (809-843) の破仏とそれに続く吐蕃王朝の破壊を間にはさんで、

前期弘通期と後期弘通期に分かれる。前期弘通期にできた宗派が古密呪派で、チベット発音を用いて、ニンマ派と呼ばれる。ニンマ派とは「古」あるいは「旧」を意味する。後期弘通期にできた宗派は新密呪派である。カギャ派、サキャ派、カダム派、ゲルク派はすべて新密呪派に属し (平松 1989:264)、ニンマ派は、「九乗の宗義」という教法を持っている。

8 世紀頃に、チベット王ティソン・デツェン (khri srong lde btsan チベットの 37 代国王) は、インドからパドマサンバヴァ (蓮華生) を招聘し、ティソン・デツェンは仏教の聖典であるダルマ (サンスクリット語の発音であり、法の意味) のすべてをチベット語に翻訳するよう依頼した。そのあと、徐々に、弟子が増え、パドマサンバヴァの直弟子 25 人がこの巨大な翻訳プロジェクトのために長年を費やした。この業績が後のチベット仏教に大きな影響を与えることになる。パドマサンバヴァはサムイェー寺を建設した。つまり、パドマサンバヴァはチベットニンマ派の「開祖」であり、「ニンマ派の信者は、ヨーギンにして賢者であるパドマサンバヴァを自分たちの師でありブツダであると主張する。ニンマ派の最初の僧院はサムイェーであり、かれらは法王時代に導入されたタイプの仏教に当たることになる」(D・スネルグロウヴ 1998:223)。

以下に調査対象地である S 村のンガォカンの概要と組織、宗教儀礼について述べる。

3.2.1 S 村落のンガォカン (集会堂) の概要

S 村落のニンマ派の集会堂は、寺院と呼ばず、ンガォカン (sngags khang 集会堂) と呼ばれる。貴徳県政府所在地から約 13.6Km の南東地区に位置し、常牧鎮政府所在地から約 7 Km の北東地区に位置している。

S 村落のンガォカンに関して、『貴徳藏族簡史』の記載によると、1747 年から 1767 年の間に建てられた。1958 年以前、S 村のンガォカン (集会堂) は 38 間があり、土地と家畜を所有していなかった。半僧半俗の宗教者 (写真 4) が 80 人いた。

写真4 ニンマ派の半僧半俗宗教者



『貴徳藏族簡史』によると、S村のンガォカン
は1980年に再建され、集会堂が1つと、僧舎が2
つ、僧侶が10人いた。現在は、集会堂が1つと15
人の半僧半俗の宗教者がいる。しかし、ニンマ派
の年中宗教儀礼を行う際には、33戸の信仰者が参
集する。

S村におけるニンマ派徒の家は少なく、30%の
家しかない。それ以外はボン教徒の家である。
村人の話によると、数年前まで、ニンマ派がボン
教徒たちと一堂のボン教寺院の集会堂でそれぞれの
年中儀礼を行っていたが、地域の経済発展や宗
教間の関係でニンマ派は、ボン教の集会堂から出
て、自分たちの集会堂を新築して独立した。ニン
マ派の集会堂は、ボン教寺院の隣、つまり村の中
心部に位置している。

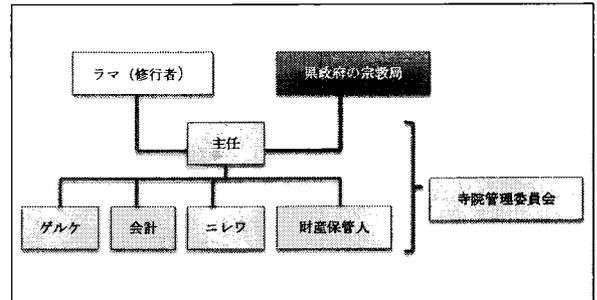
3.2.2 S村落のニンマ派ンガォカン（集会堂）の 組織運営

S村落のニンマ派の集会堂・ンガォカンの組織
は、上述のボン教寺院の組織とほとんど同じく、
ニンマ派のラマが1人、ゲルケ (dge bskos) と

チャリ⁷ (cha ris) の役割が1人で、会計が1人、
ニレワ⁸ (gnyer ba) が1人、財産保管人が1人、
主任が1人、寺院管理委員会との形で寺院組織を
形成している。

以下にニンマ派集会堂の組織運営を図3で示す。

図3：ニンマ派ンガォカン（集会堂）の組織



(出所：2015/4 現地調査により筆者作成)

(※図3のラマは性的生活ができない修行者或いは出
家者であり、県政府の宗教局は政府の役人である。そ
れ以外の役人は在家する半僧半俗の宗教者である。)

ニンマ派のンガォカンのラマは、県内のあるニ
ンマ派の寺院に居住するラマであるため、S村落
のンガォカンに通常居住していないが、S村のン
ガォカンの半僧半俗たちの教育、經典学習の状況、
宗教活動などの面を見守っている。県政府からニ
ンマ派のンガォカンへの様々な経済的補助のプト
ジェクト (補助金) を配分するとき、または、政
府の工作人がニンマ派のンガォカンを訪ねてくる
ときに、接待する役は主に主任が果たしており、
県政府の宗教局へ僧舎を新築することや、寺院を
修復することなどの様々の経済的補助プロジェクト
(補助金) を申請する役割を果たしている。主
任の任期は少なくとも3年であり、政府からも月
給を支払われている。ニンマ派の半僧半俗の宗教
者が少ないため、読誦を先導するウンゼの役割も
主任が果たしている。

ゲルケ (dge bskos)、チャリ (cha ris)、カン
ドンパ (bskang 'don pa 読経者) の役割は数年前
まで1人で果たしていたが、2000年代以降、集会
堂の宗教者でも出稼ぎなどに行くことになってから、
現在は3人で交代しながら果たすことになっ

た。その3人がンガォカンを管理し、毎日寺院の集会堂や守護神堂を掃除し、読経、聖水、バターランプを捧げる儀式的役割を果たしている。任期は年ごとに交代する。

会計の仕事は、年末に寺院の収入と支出を会計報告することであり、S村にニンマ派の宗教者が少ないため、交代する役人がいないため、任期も少なくとも3年である。

年中儀礼を行う際に、食事の担当をする役はニレワの仕事であり、数年前まで、ニレワはボン教徒の家を含めて村全家庭に食物をもらいに回っていたが、現在は、宗教間の関係があまりよくなく、ニンマ派の家にしかボン教徒の家に貰いに行かない。集会堂の年中儀礼を行う際に、S村にボン教徒の家が多いため、ボン教寺院と異なり、食事はほとんどニレワの家の財産で行うことになる。50歳のボン教徒によると、S村落においては、ニンマ派の宗教者と寺院経済が弱いため、何軒かの家はボン教に改宗したといい、ニレワの任期は年ごとに交代する。

財産保管人の仕事は、ンガォカンの収入や支出、ンガォカンの現金、財産などを保管することである。任期は少なくとも3年である。ニンマ派の集会堂も上述と同様に、伝統的寺院社会の組織と政策による管理組織との二重側面が見られ、政策による管理組織あるいは寺院管理委員会は、主任とゲルケ、会計、ニレワ、財産保管人で形成されている。

3.2.3 S村落のンガォカン（ニンマ派の集会堂）の年中儀礼

S村落のニンマ派の宗教者たちはボン教とゲルク派の年中儀礼と同じような形で独特な宗教儀礼を行っている。年中儀礼を行う日はチトウ（chos thog法会）と呼ばれ、チトウの日時が定められており、年中儀礼の運営はニレワが統括する。チトウを行う当日、礼拝者や施主などから現金や、物品を寄付された場合に、ゲルケが礼拝者の名前と金額などを記録して、集会堂の真ん中、つまり、ニンマ派の宗教者たちの前で報告し、施主たちの

ために祈願する。それらの現金と物品は寺院の収入の一部となる。

現在、S村におけるンガォカンの年中儀礼は以下に表4で示す。

表4：S村落のンガォカンの年中儀礼の日程（旧暦）

月	期間	宗教活動名
1月	10日	パドマサンバウァの法輪日の記念会 (tshes bcu)
1月	17～19日	村の年法 (sde chos)
3月	7～10日	ニユンニ修行（食禁）(smyung gnas)
3月	11～13日	祭祀 (mchod ba)
5月	2～6日	ラジャツォワの年間宗教活動
7月	10日	パドマサンバウァの法輪日の記念会 (tshes bcu)
9月	22日	寂静憤怒 (zhi khro)
10月	7～13日	獅面母経 (seng gdong)
12月	13～16日	馬頭明王 (rta mgrin)

出所：2015/4 現地調査により筆者作成

3.3 調査村におけるゲルク派の寺院社会

「ゲルク」は「徳行」を意味し、出家信者が黄色い帽子をかぶることから「黄帽派」とも呼ばれる。性的瑜珈（ヨーガ）の実践によって戒律を無視し乱れていたチベット仏教界を一喝し、「宗教改革」を行うことに成功したのが開祖のツォンカパ⁹である。つまり、ツォンカパはゲルク派の「開祖」である。

以下に調査対象地であるS村のゲルク派寺院の概要と組織、宗教儀礼について述べる。

3.3.1 S村のゲルク派寺院の概要

S村の仏教・ゲルク派の寺院は、貴徳県政府所在地から13.6Kmの南東地区に位置し、常牧鎮政府所在地から7Kmの北東地区に位置する。本村の公民館から約2Kmの東山奥に位置する。寺院の大門のところに、隣地域の寺院と同じく、大仏塔が建っており、寺院の背後に高い山脈が連なっている。山脈の下方、或いは寺院の大門外に、S村の山神・ラツェ (lab tse) が立っている。寺

写真5：ゲルク派の僧侶



(出所：2014年8月 筆者撮影)

院の下手に寺院の林地がある。寺院の前面にも高い山があり、寺院は山谷奥に位置している。僧院の集会堂の反対側にアニュ・マチェン¹⁰ (a myes rma chen 世俗の神様的一种) のラカン(廟)がある。集会堂裏の丘の上に寺院のラツェが立っている。

S村のゲルク派寺院について、『mdo smad chos 'byung』¹¹の記載によると、1779年頃、中央西藏からセジャ・ラムバ¹²が到来し、長期居住した。その後、セカンワ活仏(1780～1848年)が元の寺院をここに移動し、新たに寺院を建てた。『貴徳藏族簡史』の記載によると、1951年には51人の僧侶がおり、14院を建築していた。現在は、1集会堂と32僧舎、34人の僧侶がいる(写真5)。

しかし、2015年の時点では、S村のゲルク派の寺院に22人の僧侶がおり、僧侶たちはチベット人のみならず、省外の新疆ウイグル自治区から小僧侶が4人、甘肅省に移住しているイ族の小僧侶が1人、チベット人僧侶の中には、60歳以上の僧侶が3人いた。

省外あるいは他民族の僧侶も地方村レベルの寺院に来る理由としては、新疆ウイグル自治区出身の小僧侶とイ族の小僧侶の話によると、「自分たちの地元で読経することができる僧侶が少なく、チベット族の僧侶を招いて読経している。読経できると金もたくさんもらえる。そのため、チベットの寺院で読経(チベット語で)を学ぶために両親がチベットの寺院僧侶にさせた。将来地元に戻ったら、読経する。」また、年寄りの僧侶の話

によると、(以上にも述べたが)「数年前までは、S村に2人の男子が生まれたら、1人は自村落のゲルク派寺院を継承するためにゲルク派の僧侶にさせ、もう1人は半僧半俗のボン教徒にさせて、家の生計を継承していた。事例としては、この寺院の多くの僧侶の実家はボン教で、兄弟も半僧半俗のボン教徒あるいは半僧半俗のニンマ派徒である。しかし、数年前から、S村はボン教の家が多いため、2人男子が生まれても、ゲルク派の僧侶にさせてくれなく、僧侶になりたい場合は、県外のボン教の僧侶にさせてしまう。そのため、僧侶が少なくなり、省外の僧侶でも他民族であっても歓迎している」と語った。これに対し、S村の50代のボン教徒(男性)によると、「うちの息子は15歳であるが、学校の成績が悪く、学校に行きたくないと言いき、将来は農民になったら大変で、S村のゲルク派の寺院僧侶にさせたいが、そうしたら、他のボン教徒から「ボン教徒の子であるのに、ゲルク派の僧侶にさせた」と噂されるため、県外のボン教の僧侶にさせてもいいのだが、S村落と遠いため、僧侶になるのをもうやめた」と語ってくれた。

以上の話に基づくと、オリンピック効果による経済発展が著しい現在の中国において、宗教信仰も自由になったと同時に、地方村落の伝統的習俗も失われていったことが窺える。S村にとっても、地域経済が発展したとともに、伝統的習俗は失われ、各宗派も独立した。一方、S村のゲルク派寺院の僧侶数が少なくなった。

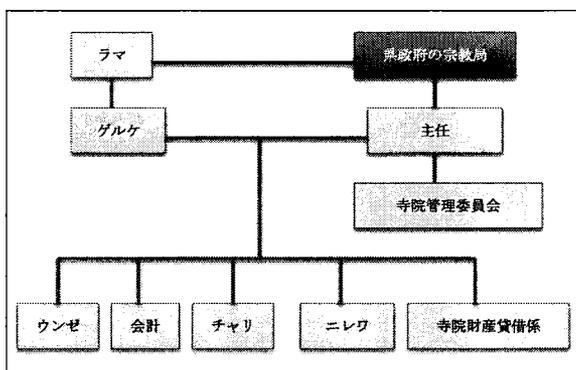
S村の多くの家¹³は、ボン教徒であり、少数の家は、仏教・ニンマ派である。数年前まで、ボン教の家であれ、ニンマ派の家であれ、2人の男子が生まれた場合に、1人の男子を仏教・ゲルク派の僧侶にさせ、もう1人の男子を半僧半俗の宗教者にさせた。ゲルク派の寺院で、年中宗教儀礼を行う際に、仏教徒の家とボン教徒の家は共同作業でゲルク派の寺院へ支援した。しかし、近年、ボン教の外来ラマの法話の影響によって、ボン教の家からゲルク派の寺院の僧侶にさせる傾向はなくなり、ニンマ派も自分たちの集会堂を建て、独立

した。

3.3.2 S村のゲルク派寺院の組織運営

中央政府が管轄しているチベット寺院社会は、村落社会の行政組織と似たような形で形成されており、調査対象である S 村の寺院も例外ではない。S 村のゲルク派寺院には、ラマが 1 人、ゲルケ (dge bskos) が 1 人、ウンゼ (dbu mdzad) が 1 人、会計が 1 人、チャリ (cha ris) が 2 人、ニレワ (gnyer ba) が 1 人、主任が 1 人、副主任が 1 人、寺院財産貸借係が 5 人、寺院管理委員会との形で寺院組織を形成している。以下に寺院組織を図示する。

図 4 : S 村のゲルク派寺院の組織図



(出所：2015/4 現地調査により筆者作成)

(※図 4 : 県政府の宗教局は政府の役人であり、それ以外の役人は在家する半僧半俗の宗教者である。)

S 村のゲルク派寺院のラマは、県外にある寺院のラマであり、S 寺に居住していないが、S 寺の僧侶たちの教育、経典学習の状況、宗教活動などの面を見守っている。

ゲルケの仕事は、「戒律や僧院での作法を管理する役割を果たす。集会堂の扉の脇にはゲク (ゲルケである) の席が設けられており、僧侶たち全体を見渡せるようになっていて、そして衣装、食事の作法などが規律に則っているかをチェックし、指導を行う」(小西 2015 : 161)。ゲルケの席の背景壁画として閻魔王の図像が描かれている。戒律や僧侶の規律を監督することや村民家で読経

儀式を行うとき、寺院へ依頼したら、寺院から村民家へ僧侶を派遣することが主な役割である。1950年代以前、寺院には僧侶がたくさんおり、寺院の規律も厳しかった。ゲルケも数年ごとに選挙で交代したが、21世紀に入って次第に、還俗した僧侶が少なくなかったため、僧侶の数も減少した。数年前までゲルケの任期は5年以上であったが、僧侶も少なく、ゲルケの責任も厳しいため、現在は年ごとに交代するようになった。

ウンゼの仕事は、集会堂内の太鼓を打ち、読誦を先導する役割を果たしている。ウンゼの席は、僧院長であるラマの側、つまり集会堂の真ん中にある。ウンゼの任期は数年前まで数年ごとに交代したが、現在は、ゲルケの任期と同じく年ごとに交代するようになった。

会計の仕事は、寺院の収入や支出、寺院の現金を保管することや、年末に寺院の収入と支出を会計報告することである。数年ごとに交代する。

チャリ、カンドンパ (bskang 'don pa 読経者) の役目は 2 人で果たしている。仕事は毎日、寺院の集会堂や守護神堂を掃除し、聖水を捧げることやバターランプで一日 1,000 回ずつ捧げること、守護神堂で読経することである。夜も寺院を守ること彼の役割である。任期は年ごとに交代する。

ニレワの仕事は、宗教儀礼を行う際に、食事の担当をすることである。年ごとに交代する。

主任と寺院管理委員会の仕事は、寺院の僧侶たちに政府からの政策を伝え、政府からの様々な経済的補助プロジェクト (補助金) を配分すること、または県政府の担当役人が寺院を訪ねてくるときに、接待することである。県の宗教局へ僧舎を新築すること、寺院を修復することなどの様々な経済的補助プロジェクト (補助金) を申請する役割を果たしている。主任の任期は少なくとも 3~4 年である。県宗教局からの通知要件がある場合に、各寺院の主任に電話連絡が入り、主任には政府から月給も支払われる。

現在は、調査地域の各寺院に政府役人の滞在する部屋が建てられており、各寺院で宗教儀礼を行うとき、県政府の役人が 2 人ずつ寺院を訪ねてき

て、宗教活動の様子を見ながら一時的滞在をしている。

寺院財産貸借係の僧侶は5人である。毎年、S村のゲルク派寺院の30～40万円ほどを民家へ貸している。貸す際、知り合いの保証人が必要であり、保証人の戸籍簿と身分証明書、借用書が必要である。その借用書に、保証人の家畜数、財産などを抵当品として書く。借りる民家は、S村の民家のみならず、村外、県外の民家もある。しかし、保証人は必ず知り合いであるのが条件である。

貸借の定期期間は1年間であり、その方式は、1万円を貸すと、利息は2千元である。寺院の主な収入も利息と礼拝者、施主に頼っている。S村のゲルク派寺は林地があり、数年前まで、家畜が多い民家へ林地の草を毎年売ってきたが、そうすると、寺院に羊や山羊、牛などの家畜が集まり、寺院の周りは汚くなるため、林地の草を民家に売っていない。

3.3.3 S村のゲルク派寺院の年中儀礼

S村のゲルク派寺院は、他の仏教・ゲルク派の寺院と同様に、年中儀礼を決まった期間通りに

行っている。1958年以前、寺院には僧侶が多く、年配者の僧侶が多数いた。その時代には、僧侶に対する戒律、或いは寺院のジャユウ¹⁴(bca' yig法・文)は現在より厳格であった。各宗教活動あるいは儀礼によって、集会堂で集合時間が異なり、深夜の1時頃に集まる場合もある。これらの年中儀礼を行う日はチトウ(chos thog法会)と呼ばれ、チトウの日時が定められていた。行事の運営は上にも述べたが、ニレワが統括する。チトウを行う当日、礼拝者や施主などから現金や、物品を寄付された場合に、ゲルケが礼拝者の名前と金額などを記録し、集会堂の真ん中、つまり、僧侶たちの前で報告し、施主などのために祈願する。それらの現金と物品は寺院の一部収入となる。

行事を行う当日、チダ(chos brda法・鈴「通知の意味」)をする僧侶はゲルケであり、ゲルケが集会堂の前で銅鑼を3回ほど打つと、僧侶たちが集まってくる。寝坊したり、間に合わなかった僧侶はゲルケに叱られ、僧侶らの話では「昔はゲルケに殴られた」ということだった。

現在、S村のゲルク派寺院の年中儀礼は以下の通りである。(表5)

表5：S村のゲルク派寺院の年中儀礼の日程(旧暦)

月	期間	宗教儀礼名
12月、1月	12月29日～1月1日	長寿トルマ
1月	11～15日	新年の大祈祷会
	1月23日～2月1日	馬頭明王
2月	8～11日(昔は8日間ほど)	活仏を祭る
3～4月	3月29日～4月16日	クンル(kun rig) (14、15日の二日間はニユンニ修行、16日に寺の年間の決算、肉食禁止の食事)
5月	22日	活仏の命日を祭る
6～8月	6月15日～8月1日	夏安居(寺院内で生活)
9月	2日	活仏の命日を祭る
	22日	Lha bbas dus chen釈尊が兜率天から降った記念日
	9月24日～10月1日	Yamarazaba
10月	10月24日～11月1日	ツォンカバの記念祈祷会
11月	冬至から8日間	長寿儀式(活仏の長寿のため)
12月	15～22日	一年のトルマを更新する

出所：2015/4 現地調査により筆者作成

四. おわりに

本稿では、1980年代に実施された宗教回復運動以降より、青海チベット族の宗教と寺院組織の運営について記述しており、とりわけ現代の青海チベット族地方村レベルにおける寺院である S 村のボン教寺院、ニンマ派のンガォカン（集会堂）、ゲルク派の寺院と三つの寺院組織を具体例として、寺院組織運営について述べた。

周知のように、1950年代から1980年代まで、中国の一連の政策の影響で宗教信仰が禁止され、中国の各地域の重要な文化財・寺院は破壊された。当時、修行を行っている僧侶たちは、強制的に還俗させられ、寺院社会の組織運営もなくなり、村落との関係も失われた。調査地域の多くの寺院の集会堂は家畜を殺す場所にされたり、公民館にしていた集会堂も多数あったと年配者たちからよく聞かされた。1950年代からの集団所有財産時代に、調査村 S 村落中心地に位置するボン教寺院も例外ではなく、ボン教寺院の集会堂は公民館にされ、寺院における諸文化財、仏像、宗教用具、宗教儀礼なども破壊され、一時的に失われた。

しかし、1980年代より、宗教回復運動の政策を実施し、それと共に、還俗していた僧侶たちの中にも再び僧侶となる者が多く出た。3.1.1 節で述べた S 村落のボン教寺院の主任の話で示すように、調査対象である S 村落のボン教寺院も1981年に本格的に再建された。宗教儀礼も再び1950年代以前と同じく定期的に行われるようになった。

しかし、以上にも述べたように、青海チベット族の宗教には、土着宗教であるボン教と仏教の各宗派であるニンマ派（古宗派）、カギャ派、サキャ派、ジョン派、ゲルク派が分布しており、中でも青海チベット族の地域で主流となっている宗教はボン教、ニンマ派とゲルク派である。1980年代まで、青海チベット族の寺院社会には、伝統的寺院組織の運営しか存在していなかったが、1980年代以降に、中央政府が寺院社会を管理する為、中国の行政村の組織と同じく、寺院管理委員会という近代的な組織を導入して実施した。それ以降、

チベット族の寺院社会には、伝統的組織と近代的組織の二つの寺院組織の運営を行ってきた。

本稿では、青海チベット族の宗教と寺院組織化に関する文化を記述したが、チベットの寺院と村落は一体どのような関係を形成しているのか、寺院社会の変遷過程について、あまり論述していない。そのため、今後の展望として、青海チベット族地方村レベルにおける寺院と宗教の役割に関して現地調査を行うと同時に、村落と寺院、宗教の関係はどのように継続、変貌しているか、そして、一つの村落に共存する三つの宗派間の関わりはどのようなものであるかについて注目したい。

謝辞

本稿を作成するにあたって、平成25年度金沢大学大学院博士号（文学）を取得した宮本眞晴氏より日本語の面倒やご丁寧なアドバイスをいただいた。ここで心から感謝申し上げたい。

本研究は金沢大学大学院における異分野融合型教育プログラム《異分野融合型文化資源マネジメント教育プログラム》の海外フィールド派遣により研究調査を行った研究成果の一部である。

【注】

- 1 反哺とは、恩返しするため、村落の貧困家庭に対して扶助する意味である。
- 2 チベットで上人あるいは聖人という意味で、サンスクリット語のグル（*gs*教師）に相当する。チベット仏教の高僧のみならず、ボン教の高僧あるいは活仏をラマと呼び、輸入語ではなくチベット固有語である可能性がある。
- 3 ゲルケは、僧侶の規律を監督する役を果たす。
- 4 カンドンパは、寺院のため、集会堂で毎日1時間ほどをかけて読経する義務を果たしている。
- 5 ウンゼは、読誦を先導する役割を果たしている。
- 6 ジンチョバは、宗教儀礼を行う際に、必要な食物を購入したり、寺院の現金を村民や他人に貸借す

- る役目を果たしている。
- 7 チャリは、毎日、集会堂と守護神堂を掃除し、守護神堂で読経する。聖水とバターランプを100回ずつ奉じる。
- 8 ニレワは、宗教儀礼を行う際に、食事の管理の役割を果たす。
- 9 ツォンカパは、チベット仏教ゲルク派の開祖であり、青海省のツォンカ山の地に生まれたのでこのように通称され、〈宗喀巴〉と漢音訳される。名はロサン・タクペーベル。
- 10 アニェ・マチェン（長野1999：54）は、マチェンポムラとも呼び、チベットの聖山の一つで、強力な山神として有名である。
- 11 『mdo smad chos 'byung』は、1982年3月に出版され、チベット語で書かれた歴史に関する書物である。〈安多政教史〉と漢訳されている。
- 12 セジャ・ラムバは、セジャは活仏の名前であり、ラムバは仏教学歴の一種、現代の博士に相当する。
- 13 本村の多くの家族の中に、仏教を信仰している嫁と、ボン教を信仰している父系家族と二種類の宗教信仰者が共同生活している。しかし、チベットは父系社会であるため、時間が経つにつれて、嫁がボン教に改宗した例が多い。
- 14 ジャユウは、各寺院にとって、寺院の主導者であるラマによって決めた規律がわずかに異なる。

【参考文献】

チベット語・文献

- thu' u bkaun blo bzang chos kyi nyi ma
2005 『thu' u bkaun grub mtha'』 kan su' u mi rigs dpe skrun khang (『宗教源流史』甘肅民族出版社)
- drag dgon pa dkon mchog bstan pa rab rgyas (brtsams)
1982 mdo smad chos 'byung.kan su' u mi rigs dpe skrun khang. (智貢巴・貢去乎丹巴绕布杰 (著), 『安多政教史』甘肅民族出版社)

日本語・文献

- 石濱裕美子 2011 『清朝とチベット仏教－菩薩王となった乾隆帝－』 早稲田大学出版部
- 煎本孝 2014 『ラダック仏教僧院と祭礼』 法蔵館
- 牛 黎涛 2005 『チベット社会の変化とチベット族の

道德観』『仏教文化学会紀要』 仏教文化学会

- 2008 「チベット近代の寺院教育」『仏教文化学会紀要』 仏教文化学会
- 2009 「チベットにおける寺院経済の発展と展開」『佛教文化学会紀要』 佛教文化学会
- 2014 「チベット仏教文化の伝承と影響について」『総合佛教研究所年報』(36)：195～211.大正大学
- 大川謙作 2013 「チベット仏教と現代中国－包摂と排除の語り」『現代中国の宗教－信仰と社会をめぐる民族誌』 川口幸大 (他編), 昭和堂
- 王森 2016 『チベット仏教発展史略』 田中公明 (監訳), 三好祥子 (翻訳) 科学出版社東京
- 小西賢吾 2015 『四川チベットの宗教と地域社会』 風響社
- 立川武蔵 2009 「ボン教とチベット仏教」『チベットボン教の神々』 長野泰彦 (編), 国立民族学博物館
- D・スネルグローヴ 1998 『チベット文化史』 奥山直司 (訳), 春秋社
- 長野泰彦 「ボン」『文化人類学事典』1987：712, 石川榮吉, 梅棹忠夫 (他編), 弘文堂
- 長野貞子 1999 「神と人との交流の宴 ルロ」『季刊民族学』(第23巻 第3号) 国立民族学博物館 (監修) 千里文化財団
- 則武海源 1993 「青海省チベット仏教寺院の現状について－西寧市・東海地区を中心にして－」『大崎学報』(第149号), 立正大学仏教学会
- 1995 「青海省チベット仏教寺院の現状について II－黄南・果洛チベット族自治州を中心にして－」『大崎学報』(第151号), 立正大学仏教学会
- 2005 「青海省チベット仏教寺院の現状について III－玉樹チベット族自治州を中心にして－」『大崎学報』(第161号), 立正大学仏教学会
- 平松敏雄 1989 「ニンマ派と中国禅」『チベット仏教』 岩波講座・東洋思想 第11巻岩波書店
- 伴真一郎 2005 「アムド・チベット仏教寺院ツァン・ゴンバ (瞿曇寺) のチベット文碑文初考－永楽16年「皇帝勅諭碑」の史料的価値の検討を中心に－」『大谷大学大学院研究紀要』(第22号), pp189～219, 大谷大学大学院
- 森雅秀 1999 「青海省同仁県のボン教寺院」『チベット文化域におけるボン教文化の研究』 長野泰彦 (編), 国立民族学博物館

中国語・文献

- 丁莉霞 2014「当代藏传佛教寺院经济现状及其管理探析」『世界宗教文化』第1期：pp72～77, 中国社会科学院世界宗教研究所
- 图齐 (Tucci) 2005『西藏宗教之旅』耿昇 (訳) 中国藏学出版社
- 李安宅 2005『藏族宗教史之实地研究』上海世紀出版集团
- 李士发 2010『貴徳風情』远方出版社
- 貴徳県志編纂委員会 1995『貴徳県志』陕西人民出版社
- 《海南藏族自治州》编写组 2009『海南藏族自治州概况』民族出版社
- 賀尔加 2012『貴徳藏族簡史』青海人民出版社
- 曾传辉 2003「藏区宗教现状概况 - 藏区宗教现状考察报告之一」『世界宗教研究』第4期：pp51～58, 中国社会科学院世界宗教研究所
- 周润年 1998『中国藏族寺院教育』甘肅教育出版社
- 王辅仁 2004『西藏佛教史略』青海人民出版社
- 绒巴扎西 1993「藏族寺院经济发生发展的内在缘由」『民族研究』(第4期) 中国社会科学出版社

英語・文献

- Tsering Thar (才讓太) 2003 "Bonpo monasteries and temples in Tibetan regions in Qinghai, Gansu and Sichuan." In S.G.Karmay and Y.Nagano eds. A Survey of Bonpo Monasteries and Temples in Tibet and the Himalaya. Osaka: National Museum of Ethnology. pp. 247 - 268.